

第32回 東京芸術文化評議会 速記録

- 1 日 時 令和3年12月21日（火曜日）16時00分から17時00分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、大野評議員、片岡評議員、コシノ評議員、
妹島評議員、芹澤評議員、田中評議員、野田評議員、
日比野評議員、小池知事
- 4 事務局からの報告事項
 - ・東京都2020大会の文化プログラムの実施状況について
 - ・アートにエールを！東京プロジェクトの実施状況について
- 5 議 事 東京文化戦略2030（仮称）の策定について

6 発言内容

○青柳会長 それでは、ただいまより、第32回の東京芸術文化評議会を開催いたします。

皆様、お忙しい中、御出席いただきありがとうございます。

本日は、8名の評議員の方に御出席いただいております。

それでは、初出席の評議員の方も多くいらっしゃいますので、出席の評議員を五十音順で御紹介したいと思いますので、よろしくお願ひします。

最初に「あ」ですから、私、青柳正規と申します。よろしくお願ひいたします。

次に、大野和士評議員です。よろしくお願ひします。

○大野評議員（一礼）

○青柳会長 片岡真実評議員です。

○片岡評議員 よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 コシノヒロコ評議員です。

○コシノ評議員（一礼）

○青柳会長 妹島和世評議員です。

○妹島評議員（一礼）

○青柳会長 芹澤ゆう評議員です。

○芹澤評議員 よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 田中優子評議員です。

○田中評議員 よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 野田秀樹評議員です。

○野田評議員 よろしくお願ひします。

○青柳会長 日比野克彦評議員です。

○日比野評議員 よろしくお願ひいたします。

○青柳会長 それでは、議事次第に沿って進めたいと思います。

本日の議事は公開とし、後日資料や議事録を公開したいと思います。

それでは、まず事務局から報告をよろしくお願ひします。

○文化総合調整担当部長 文化総合調整担当部長の片岡でございます。

私のほうから文化プログラムの実施状況とアートにエールを！東京プロジェクトの実施状況について御報告いたします。

まず文化プログラムの実施状況でございます。

ここでは、文化プログラム推進部会で御議論いただいた内容を踏まえて取りまとめた、文化プログラムの実施総括及びレガシーについて御報告いたします。

東京都はリオ大会以降、多彩な文化プログラムを実施してきました。2020大会直前はコロナ禍で制約もありましたが、期間中、約16万件のプログラムを実施し、約3,900万人の方に御参加いただいたところでございます。

成果でございます。

1点目は、人々の記憶に残る斬新で独創的なプログラムを展開した点です。

東京大壁画、まさゆめ、パビリオン・トウキョウ2021、ザ・コンスタント・ガーデナーズを例として取り上げてございます。

2点目は、誰でも身近で気軽に芸術文化を享受できる機会の提供です。

サラダ音楽祭、TURN、六本木アートナイト、トパコを例として挙げてございます。

3点目は、芸術文化に関わる人材や団体の成長に繋がる新たな挑戦の場を提供した点です。

Coded Field、東京キャラバンを挙げてございます。

4点目としまして、東京都と他団体等との連携による相乗効果の創出でございます。

伝承のたまてばこ、オペラ夏の祭典を例として挙げてございます。

5点目が、コロナ禍という困難な状況下でも知恵を絞って芸術文化の魅力を発信した点でございます。

Tokyo Tokyo FESTIVAL全体に言えることですが、ここではオンラインでのダンスイベントや、感染対策を徹底して行った子供向け事業の2枚の写真を挙げてございます。

コロナ禍であっても様々な工夫を凝らして実施したことで、芸術文化が人々の心の支えや喜びに繋がることを再認識しました。

一方、不十分だった点もございます。

総じて、祝祭感の創出や十分な大会気運の醸成が困難ではありましたが、十分な参加機会を提供できない面もあったことや、間近で見たいという期待に応えられなかったこと、訪日観光客に東京の芸術文化を体験してもらえなかったことなどを挙げています。

また、一部、障害のある方にはアクセスが難しいイベントがあったことや、多言語対応

などの効果検証ができなかったこと、2021年は東北の方々と直接交流できなかったことも挙げています。

これらの不十分だった点を踏まえまして、選択肢を増やすこと、様々な方法で継続的な広報を展開すること、アクセシビリティを強化することの3点をもって、引き続き、取り組んでいくことが重要としています。

以上を踏まえまして、Tokyo Tokyo FESTIVALを通じて、次のような状況ができたと考え、5点のレガシーとして取りまとめました。

- 1つ目が、より多くの方が芸術文化に親しむことができる環境が整い始めたこと。
 - 2つ目が、多様な価値や個性を認め合える共生社会に向けて着実に歩を進めたこと。
 - 3つ目が、アーティストの創作意欲・経験値の向上に繋がっていること。
 - 4つ目が、団体等との強固なネットワークが構築されつつあること。
- そして、5つ目が芸術文化に対する人々の理解が一層促進されたことです。

今回は大会直前からコロナ禍という特殊な状況でしたが、文化プログラムで得た知見を次の政策に引き継いでまいります。

部会報告は以上でございますが、皆様の席上に事後広報として制作いたしましたTokyo Tokyo FESTIVALスペシャル13のカレンダーを配付してございますので、ぜひお持ち帰りいただき、御活用いただければ幸いに存じます。オンラインで参加されている方々には後日郵送させていただきます。

続きまして、「アートにエールを！東京プロジェクト」の実施状況について、御報告いたします。

本プロジェクトは新型コロナウイルスの感染拡大を受けた緊急支援事業として、都が全国に先駆けて実施したもので、コロナ禍でも文化の灯を絶やさないため、活動の場を失い、自粛せざるを得ないアーティスト、スタッフの方々を支援するとともに、自粛期間中の都民に、在宅でも芸術文化に触れ、楽しんでいただける機会を提供することを目的としています。

昨年5月から募集を開始し、アーティスト等が個人またはグループで動画作品を制作し、それを専用サイトで配信することで、出演料相当として1人10万円を支援しました。

この個人型では音楽、演劇、舞踊、美術、映像など、幅広いジャンルのアーティスト・スタッフ約2万人に支援することができました。

昨年6月からはコロナ禍で公演が中止等となった団体が、都内の劇場、ホール、ライブハウス、演芸場等で行う公演を支援対象としました、ステージ型を始めました。こちらは今年に入ってから2回実施しまして、計600の公演を採択してございます。

本プロジェクトを通じて制作された動画は合わせて8,000を超え、現在も専用サイトで公開中です。

説明は以上となります。

○青柳会長 ありがとうございます。引き続きまして、議事に入らせていただいて、東京文化戦略2030の策定につきまして、文化政策部会長をお願いしております、片岡評議員より御説明をよろしくお願いいたします。

○片岡評議員 オンラインで失礼いたします。

文化戦略案を検討するに当たりまして、文化政策部会で6回にわたり議論をしてまいりました。本日、文化政策部会を代表しまして、文化戦略の概要について、資料に沿って20ページほどスライドがございますが、御説明させていただきます。

名称が「東京文化戦略2030～芸術文化で躍動する都市東京を目指して～」というふうにしております。まず、文化戦略の位置づけですけれども、2030年までの長期計画として、文化行政の方向性や重点的な取組を示したものになります。

現在は東京文化ビジョン（2015～2025年）という長期計画を推進していますが、東京2020大会の文化プログラムが、今御説明にありましたように終了したこと、それから、コロナ禍を経験した知見、「アートにエールを！」を実施したこと、そして、DXの急速な進展などにより、新たな文化政策が必要になったということで、東京文化ビジョンは途中ではありますが、「未来の東京」戦略にも連動しながら、2030年までの計画・戦略を立てたということになります。

2ページに行きます。「東京文化戦略2030」の方向性といたしましては、誰にでも・どこでも・気軽に芸術文化を楽しめる取組みとして、新たな楽しみ方、方法の問題を拡大していくこと。そして、国内外のアートハブとなる芸術文化の拠点形成して、ネットワークを構築していくこと、継続的に活動できる仕組みを構築していく、この4つの方向性を考えています。

次の3ページに行ってください、目指す2040年代の東京の姿です。2030年までの文化戦略ではありますが、「未来の東京」戦略が2040年代の東京の姿を描いているということもありまして、この新しい文化戦略としては、40年代までを考えております。

誰もが芸術文化を楽しめる環境づくり。楽しむということと、それから発見する、喜びや感動、新たな価値の発見をもたらす。そして、アーティスト、それからプロジェクトを育てていくという仕組みづくり。それから、世界を魅了する創造性を生み出す。この4点が循環系になるといいのかなという絵になっています。

4ページを見ていただきまして、それぞれが戦略1、2、3、4というふうに分かれています。基本的には、この戦略1、2が一般都民を対象にしたもので、ウェルビーイングということで、人々の幸せに寄与するというのが戦略1。戦略2が、様々な方法で、いかに芸術文化の力でインスパイアしていくということ。戦略3が、アート界の中で、芸術文化のハブ機能を強化するという、現段階では、特に新たな施設をつくるということではなく、求心的な活動を見せていくという、そういう機能としてのハブという言葉

使っています。それから、戦略4では、アーティストや芸術文化団体が継続的に活動できる仕組みをつくるという、エコシステムの問題を語っています。

次のページ、戦略1は、方向性としては若い世代の鑑賞者が少ないという結果が出ているということもあり、一方Tokyo Tokyo FESTIVALなど、ツイッターのフォロワーは2021年になって、飛躍的に増えているということもありますので、芸術文化の敷居をいかに低くして、誰もがどこでも気軽に触れられるようにする。そして、健康福祉などの分野でも、課題解決に向けた新たなアプローチを開発する。そして、子供や若者に向けて、鑑賞する機会を増やすというようなことで、3つプロジェクトを挙げています。

戦略1の1には地域活性化プロジェクト、芸術参加の敷居を低くする取組ということで、まちなかにアートを置く、あるいは、オンラインを活用する。そして、伝統芸能を若いうちから体験をするというようなことで、芸術文化へのアクセシビリティを広くしていくという取組です。

戦略1の2。だれもが文化でつながるプロジェクトということで、こちらは2022年度にはクリエイティブ・ウェル・インターナショナル・カンファレンスということで、子供も高齢者も障害者も、そして外国人も参加できるようなカンファレンスを創設するなど、世界で芸術文化におけるダイバーシティやインクルージョンの先進都市となるということを目指すものです。

8ページは、キッズ・ユース (Kids Youth) ・プロジェクトということで、子供の頃から芸術文化に触れることができる取組や若年層として主体的に芸術文化を体験する取組といったことで、将来の芸術文化ファンをつくっていくというプロジェクトです。

戦略2。人々をインスパイアするという中で、どんな形で喜び、感動、新たな価値の発見をもたらすかということの中で、方法としましてはテクノロジーの活用を推進する。新たな芸術文化の楽しみ方、どんな形の新しい方法があるか。そして、芸術文化のビジネスへの活用。それから、国内外の観光客を魅了していく。観光面との接続を考えたものになります。

戦略2の1は、スマート・カルチャー・プロジェクトということで、デジタルテクノロジーを活用した取組。都立文化施設での取組、それからスタートアップ企業との共同事業などを駆使しまして、これまでにない鑑賞体験を創出、提供するということを考えています。

戦略2の2は、生活の中にアートを取り入れていくということです。先日も「アートウィーク東京」という新しいイベントが始まりまして、アートバーゼルの協力も得ながら、点在する美術館やギャラリーをバスで巡るというイベントを始めましたが、これも来年度以降は東京都が主催的に関わっていくということで、アートの新しい楽しみ方を広げ、アート市場の拡大にも貢献するようなことを支援することを考えています。

戦略2の3です。アート&エンターテインメント・プロジェクトということで、こちら

は官民連携しながらアートだけではなくて、エンターテインメントを含めた多様なジャンルで東京のエリアをつなぐフェスティバルを展開するなど、国内外の観光都市をいかに魅了できるかというようなことを考えております。

戦略3にまいります。こちらは国内外のアートシーンの中心として、世界を魅了する創造性を生み出すというものです。

東京には芸術文化資源が大変集中をしていますが、なかなか海外から来たときにもどこにまず行けばいいのか、そういうハブになるような場所がなかなかないという課題もあり、芸術文化活動やネットワーキングにおいて魅力的な場所を作ること、世界中から魅力ある様々な人材を呼び込むことができ、新たな創造に繋がっていくようなこと、そして才能のあるアーティストを発掘して、海外展開を支援して国際的な評価を高めるということを目指しています。

次が戦略3の1になります。アート・ハブ（ArtHub）・プロジェクトということで、どんな形になるかは、まだこれからですけれども、アートのショーケース、あるいはDXでイノベーションを創造する。交わりや新たな発想を促進していく、そして担い手を育成・支援するような、そうした機能を持つアート・ハブを交流の拠点としてつukれないかというような計画です。

戦略3の2にまいります。海外発信プロジェクトということで2020大会の文化プログラムで、海外の文化団体等とのネットワークが広がったこともあり、これを継続していくためにも東京発のアーティスト、作品を海外に広げ、東京のアートシーンに世界から注目を集めていくということが必要ではないかと考えています。

16ページに参ります。アーティストや芸術文化団体等が継続的に活動できる仕組みをつくるという、エコシステムの問題になります。現状の取組の中では、コロナ禍で芸術文化団体の約7割が収入半減していることもありまして、今後のこの文化戦略を実際に実現していく、その核となる担い手をどのように育成していくのか。そして、ネットワークを形成して、新たな活用につなげていくこと。それから、インフラの所有・維持の負担をどのように軽減できるのか、そこを支援していくこと。そして、新しく環境問題へ取り組む社会的貢献などにより、民間企業や都民による支援のマインドも醸成できないかというような方向性を考えています。

次が戦略4、アーティストのステップアップ・プロジェクトです。こちらの図は、美術の分野を例にしたものですが、新人から若手、そして中堅へ発展していくプロセスで、それぞれの段階で支援をしていくということで、例えばこの中堅の現代美術の賞、TCAAは、既に始動していますけれども、大変高い評価を得ているものです。現代美術だけではなく、演劇・音楽・伝統芸能など、ほかの分野でもこうしたステップアップのモデルをつくり、これに沿って段階的支援をしていくことができる取組にしたいというふうに考えています。

戦略4の2は担い手育成支援、そして創作環境の向上プロジェクトということで、芸術文化の担い手、アーティストだけではなく、様々な舞台関係の技術者なども含めて、芸術活動を応援していくような人材を育成していくこと。それから、創作環境の向上ということで、稽古場やアトリエ、スタジオなどを整備していくようなこと、それを低廉で賃貸していくような、そうしたことができないかということになります。

この東京文化戦略2030はかなり幅広い提案ですので、これを実際に実現するためには、推進体制をどのようにしていくのかということが非常に重要になってくると思います。

東京都を中心に、政策連携団体にも様々な役割を求め、そして東京都歴史文化財団、そして東京都交響楽団も含めて、共にどうしたら、どのような形でこの戦略を具体化できるのかということについて今後ディスカッションしていくことになるのかなと思いますが、これまで東京都歴史文化財団の中であって、アーツカウンシル東京として活動を進めておりました部門につきましては、本部との関係性を強化し、事務局と一体化した形で、この企画戦略機能を強化していこうというようなことで考えております。最後、20ページになりますけれども、東京文化戦略2030が「芸術文化で躍動する都市東京を目指す」そのイメージというふうになります。

皆様の御意見をお待ちしております。

以上になります。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、評議員の皆様から、今の片岡評議員に発表していただいた、東京文化戦略2030の策定等を踏まえながら、御意見をいただきたいと思います。

なお、時間の都合がありますので、お1人当たり、大変恐縮ですけれども二、三分でまとめていただけるとありがたいので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは御発言、どなたでもどうぞ。

○コシノ評議員 コシノでございます。よろしくお願いいたします。

芸術文化のまず敷居を低くするという企画に対して、大変共鳴させていただきました。

私は多くの若い人たちにこういった日本の文化や日本の芸術に対してもっともっと知っていただきたいという考えの下に、実はこの春大きな展覧会を神戸県立美術館で開催しました。

そのときに実感しましたのが、デジタルでいろんなものを見せて、非常に今の人たちはとてもよくそういったことの情報交換ができていると思うんですけれども、実際に目の前で物を見て、そしてそれを全部全て、携帯で写真撮ってもいいよって、それをやることによって、すっごく多くの若い人たちが集まってきて、それを見た上で、実際にそれぞれまたお互いに情報公開しながらどんどん、どんどん広まっていくんですね。

だから、その物を実際に見せていくことのすばらしさというものを実感いたしまして、今後もっともっと具体的にそういった機会をつくっていくべきではないかということを感じました。

いろいろ言いたいことはあるんですけども、今日はあまり時間がございませんので、現実的には、デジタルだけではない、本当のいいものを実際に目の前で見せていく機会というものをいかに多くつくっていくかということを考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

確かにリアルは非常に重要だと思いますが、ほかの評議員何かございますか。

妹島評議員、お願いします。

○妹島評議員 妹島です。

今年はパビリオン・トウキョウ2021に参加させていただきましたけれど、やはりまちなかで散らばっているアートに偶然出会ったりするのは面白いものだなと思います。今回の発表にあったように、芸術・文化活動に若い人がもう少し気軽に参加できるような、確かにコシノさんがおっしゃられるとおりそういった活動が広まって、どんどん相乗効果みたいになっていったら、教育とアートがいろいろ混じり合って面白いなと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

ほかに関心ありますか。

芹澤評議員、お願いします。

○芹澤評議員 まず1つが、このパブリックアートとかいろいろなところで、いろいろなことが起きていたみたいなんですけど、なかなか情報というものがどうやって得たらいいかとか、あと例えば町なかで通ったときにぱっと見て、これ何だったんだろうと後で分かるような何かこう方法が、よりスムーズにそういった情報が後からでも得れるような形があるといいなと思います。

それから2つ目が、やはり子供たちという点では、私子供時代とかヨーロッパで過ごしまして、やはりクラス中で例えば美術館に行って、その日は一番好きだった絵の前に半日ずっという、それを写生して帰ってくるとか、そういうクラスもありましたし、パリで高校生時代はパリ管弦楽団の最後のドレスリハーサルとき、無料でいつでも行けたというすごい利点もありました。

それから3つ目が、この中で唯一企業人ということなので、この企業のムーブメントとかいろいろ書いてはありますが、例えば、それやはり文化芸術の支援ということをより強く方針として打ち出すのであれば、例えば税金の低減とか、企業がサポートした分だけの税金の軽減とか、そういった、ややファイナンシャルインセンティブのほうも具体化していくと、企業も乗りやすい。そしてあと、企業と、ただ言うのではなくて、やはり、ややオーナー系が多いとは思いますが、企業人の中で、より文化芸術に造詣が深い方

もおられるので、そういった個人を「一本釣り」でつかまえていくのもいいかと思えます。
以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

オンラインでいらっしゃる大野評議員、何かございますか。

○大野評議員 はい。御紹介をいただきましたプロジェクトに関して、大変興味深く関わらせていただきました。さらなるアイデアの発展と、そのリアリゼーションに向けた動きが加速するように、心から祈っております。

一方におきまして、そうしたことを進めていくために、今のこの現状ですね、コロナというのが私たちには重くのしかかっているというのが現実として突きつけられている状況でありまして、私どもの分野でも、今のこの外国人一斉入国禁止ということは、ある意味での、鎖国令みたいなものだと思うんですけども、それによって、12月の演奏会、あるいはオペラも含めてそうなんですけども、あるいは12月から来年の1月にかけても、外国人の主演、あるいは指揮者を呼んでやる公演というのは、もうほとんど不可能になっているというのが現状であります。

あるいは、小学校の先生に聞いた話ですけども、この2年間、学校で音楽の授業というのが成立しなくなっているということです。それはどうしてかということ、みんなで声を出して歌うことができないからであります。結局、飛沫の問題というのがありますので、どこまで、どのようにそれを気を遣ってやればいいのかというガイドラインというものが、なかなか、学校によっても解釈が違ったりするものですから、一様にはいかないといったところがあります。子供さんたちが、まず、縦笛でもなくハーモニカでもなく、最初の音楽体験というのは歌なんです。歌を歌うことです。ところが、それができない。みんなで集まって、歌を歌うことができない。それから、外に出て、ちょっと間隔を空けながら声を出すということもやってみたけども、でも、やっぱりみんなで集まって声を出すというのはなかなか難しいままだということで、音楽の体験というものが根本的に揺らいでいる状況なんです。

恐らく美術館に行くとかいうことも、やっている方々は非常に、先生方も含め、盛んにいろいろ指導はしていただいて、そういう動きも加速しつつあったときの、このコロナの襲来でありましたので、それも今のところお子さんたちをそうした場に連れていくということもできないということなので、このウィズコロナの状況下で、どのようにそれを推進していくのかということの方法論というものが非常に討議されるべき事柄なのではないかというふうに私は思います。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

日比野評議員、お願いします。

○日比野評議員 ありがとうございます。

戦略1、2、3、4、片岡さんの部会で四つの案を立ててまとめていただき、大変分かりやすく理解できました。

特に1番のウェルビーイングの実現に貢献する、心の豊かさというものに対する戦略1が肝心の戦略になっていくと考えます。戦略1がレガシーとして続けていくことによって、芸術の力で人々に喜びを与えるという戦略2に新たな価値の発見をもたらすというものになり、そして、戦略3の国内外のアートシーンを中心として世界に発信していくということにもつながり、更に戦略4の継続的に活動できるエコシステムを作ることになっていくのだと考えます。戦略1のウェルビーイングの実現に向けてということが全てのこのシーンにつながる土台になるんだと思います。

なので、ぜひ、ウェルビーイングのものをきちんと2030に向けて、より力を入れてやっていくのがとても大事だなと考えています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

田中評議員、お願いします。

○田中評議員 私は最初の戦略の目標の2に注目しています。というのは、デジタルについて、日本の美術館はさほど進んでいないんですね。世界の美術館を見ると、本当にたくさんのお宝をすばらしい状況で見ることができるんですけども、日本の美術館はそれがまだまだできておらず、世界への発信ができていません。

例えば江戸時代でいいますと、浮世絵とか、それから、もっと前の時代の絵巻とか、そのようなものは、実はデジタルに大変向いているんです。なぜかという、クローズアップすることによって、より鮮明にわかります。それから、見え方とか見せ方もとても大事です。例えば今、武蔵野ミュージアムで「ダニーローズ・スタジオ展」というのをやっているんですが、浮世絵を分解して組み合わせ、素晴らしいデジタル作品を作っているんですね。浮世絵だけで、デジタルを駆使していろんな作品ができてしまう。それを外国人がやっているんです。ところが日本人はそれをなかなかできないでいる。

さらに能とか歌舞伎について言うと、字幕がつけられる状況で見るとというのは、日本人にとっても、もう古い言葉が分からなくなっているのが必要です。日本語の現代語の字幕をつけたほうがいい。もちろん英語字幕だとか、いろんな言葉の字幕をつけることによって、より理解が進むはずなんです。

江戸博もバーチャル化することなんですけど、江戸博で展示しているもののほとんどは、私はバーチャルで十分伝わると考えています。

分野によるかもしれませんが、日本の美術って、非常にデジタルに向いているものが多いと思いますので、それを発展させる必要がある。もちろん何となくやればいいということじゃなくて、どう見せるかという演出力が必要なんですけど、それとともに開発していくことによって、全世界に発信できるチャンスだと思っています。東京都にはたくさん

の美術館がありますので、率先してそれを進めていただきたい。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、野田評議員、お願いします。

○野田評議員 ありがとうございます。各評議員のおっしゃることは、全て同感でありまして、私は特にこの文化戦略の中では、文化のハブ機能をつくるということが非常に大切なことだと考えます。

コロナによって2019年までしかできなかった東京キャラバンの5年間活動報告も兼ね、その継続をするということが、非常にハブ機能になるのではないかとということで、提案をさせていただきます。まず、1分ほど、キャラバンの5年間をご覧いただければと思います。

(動画)

○野田評議員 この東京キャラバンは東京都からオリンピックの文化事業として依頼され、私が総監督を務めてきました。

2015年の駒沢オリンピック公園で野外公演を始めて以来、小池都知事にも御覧いただいたのはリオデジャネイロですね。国内外、ワークショップなどを含めて全国22か所でやってきた文化サーカスです。その文化サーカスという名前のおり文化のジャンルの垣根を超えて、例えば、舞妓さんとロボットの舞であるとか、秋田音頭とニューヨーク在住のタップダンサーとのパフォーマンス。それから、なまはげと若い女性デュオのパフォーマンス。さらにアイヌ民謡と琉球音頭とが入り混じったコラボレーションなど、とにかく到底混じり合いようのないもの同士が混じり合う、刺激的で新しい感動を生み出してきたと自負しております。

この東京キャラバン、そもそもオリンピックの文化事業というものが、オリンピックが終わると同時に何も残らず使い捨てのものにならないようにとオリンピックの遺産として残るべく文化レガシーとして発案されました。

そこでこのたびの「未来の東京」戦略なんですが、文化の視点から見たときに、まさにこの東京キャラバンが様々な文化のハブ、つまり一たび立ち寄って、そしてほかの文化と混じり、リフレッシュされ、新しいものを目指して旅立つという、そういう場所にふさわしいイベントではないかと思い、ここで改めて提案させていただきます。

「未来の東京」戦略を前もって、拝見いたしました。誰がいつまでに何をやるかという具体性はまだ見えてないので、とりわけ、今の「コロナ禍」の不安定な状況を見るにつけても、今のうちに「ポストコロナ戦略」というのか、そういうものを具体的に先手を打つのが良いと思います。

その意味でも、「東京キャラバン」という実績もあるパフォーマンスは、様々な東京の戦略につながるものだと確信します。例えば、キャラバンのパフォーマンスの公演当日に

近くでキッズ・ユースなどを融合させることも可能ですし、また東京芸術祭のオープニングイベントも可能ですし、東京芸術劇場には、運よくハブになりやすいイベントもありますので、東京へのアートシーンに世界の注目を集めることも可能かと思えます。このライブは、文化戦略の目玉である、いわゆるオンライン配信の「スマート・カルチャー・プロジェクト」において、発信させることも可能かと思えます。オンラインのものというのは、形だけじゃなくて、中身、何を発信させるかというのは非常に大切だと私は考えます。そういう意味でも、質・量ともに、このキャラバンは格好のパフォーマンスかなと思えます。

こうした文化のハブ機能を持つ「東京キャラバン」ですが、恐らく、都知事がこれから始めようとしている文化戦略に合致しているものではないかと思ひ、その継続を改めてここで提案させていただきます。

これは私の私利私欲で言っているものではなく、加わったパフォーマーや関係する皆さんから非常に多くの継続を望む声をいただいていますので、その声を紹介させていただきます。

松たか子さんは、「面白い人々が一堂に会する「お得」な場。伝統を守り伝え続ける方々の美しさ。」だと。

それから、東京スカパラダイスオーケストラの谷中さんは、「生活と人生が凝縮されたような時間。日本人ならではの「文化の換骨奪胎」と声をいただいております。

これは、祇園祭の鷹山保存会の囃子方さんの言葉で、「プロの演奏グループではない私たちがどこまでできるか大変不安でした。他の奏者とのコラボ演奏など想像すら出来ませんでした。亀岡での公開リハーサルで何となくイメージが出来て、そこからはキャラバンの一員として携わることへの責任と共に喜びを感じるようになりました。世界レベルの皆様と共演出来て身に余る光栄でした」というのがあります。

これは京都の写真で、そのときロボットと一緒に舞妓さんがコラボレーションしたのですが、祇園甲部芸妓さん・舞妓さんは、「祇園甲部の舞妓、芸妓の心の中には、暮れゆく二条城の夕景や、眩い光と共に創作されたパフォーマンスが生き続けるのだろう。おおきに。」と。

それから、村田製作所チアリーディング部（球乗り型ロボット）ですね。「二条城で2日限りの“旅する文化サーカス”に出演した後は着物を着る機会も増えました。日本の文化と先端技術が交わることでより多くの方に喜んでいただけたと思っています。」と。

これは秋田市竿燈会の写真です。上米町一丁目竿燈会は、「リハーサルを行っても、「本当に大丈夫だろうか」という不安な気持ちだらけでしたが、次第に出来上がっていく様子を肌で体感し、言葉で言い表せないような感動を覚えた。東京キャラバン in 秋田をきっかけに、その年の12月には、チャラン・ポ・ランタンさんが秋田で初ライブを開いてくださり、参加メンバーほとんどで応援に行き、「どっこいしょコール」をした。」と。

六本木の写真ですね。

参加した宇治野さん、現代美術家ですが、「普段ほぼ1人で作品制作をしている僕には、ハイパー非日常の世界です。全国から集結したパフォーマンスが、高速回転。今もまだ微熱が残っている感じで、日々を過ごしています。」と。

そして、北海道、これは沢さんという人形劇師のふだんウイーンにいらっしゃる方ですが、「つらくてもいっしょに頑張れば希望はある＝それが愛だ、という種類の感動ばかり繰り返し提供される日本の中で、人間はもっと複雑で、もっと深い。忘れられた魂の底にある感動を探そう、そのために日本中の芸能をつなごうとする舞台。それは東京キャラバンにしかできない未来へのドラマツルグだと思うのです。」と。

最後に、これは豊田市の棒の手保存会の言葉です。「東京キャラバン in 豊田から3年経った。僕は今、同世代の仲間と新しい演技を作成している。そんな僕の背中を押すのは、東京キャラバンの経験から生まれた1つの考えだ。「伝統を守ることは、形を変えず続けることではない。今を生きる僕らが、先代の意思を尊重しながら、その時代の人々を魅了するために変化させること。」と。このような声を多くいただきました。ここで改めて、東京キャラバンの継続をお願いします。

いわゆる、ブラックホールのなもので、何でも吸い込むことができるので、ぜひ、と思い、継続を提案いたしました。

○青柳会長 ありがとうございます。

文化戦略をまとめてくださった片岡評議員、今、皆さんのいろいろな御意見を伺って、何か付け足すことはありますか。

○片岡評議員 はい、いずれにしても、かなり幅広い戦略になっていますから、それを具体的にどのチームがどのような方法でやっていくのかという、その具体性のプロセスを来年度以降、議論していくのかというふうに思っていますので、皆様の御意見をまた事務局と協議をしまして、進めていきたいと思えます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それから、一番最初に発言をされたコシノ評議員、何か付け足すことはありますか。

○コシノ評議員 次の世代を担う子供たちに対する積極的な、そういった文化活動をもっともっと真剣にやっていてくべきじゃないかと思うんです。

何が大切かっていうと、我々ぐらいの年齢になってくるとつないでいくということが非常に大事で、やはりすばらしい未来をつくるために、若い子供たちへの教育、または感動を覚えるような行動を積極的にいろんな形で施行していくべきだと思います。

先日の展覧会では、図録というよりは若い人たちのこれからの勉強のための参考書みたいな図録をつくったんですね。そうして感じていただくということが非常に大切で、子供たちが何かやる気になったり、新しいものに感動したり、そういったチャンスを本当に真剣につくっていくべきではないかなと思います。

単なる一般的教養というよりは、むしろ文化・芸術、そういった意味での重要性をもつと説いていかなきゃいけないなと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

妹島評議員、お願いします。

○妹島評議員 私もその4に書いてあることかもしれないけど、やはり子供たちからどんどんつながっていくという活動をもっと具体的にやっていくことがすごい重要だと思いました。それから今、お聞きしたキャラバンには私は参加したことがないのですが、写真で見ているとすごい楽しそうだなと思うんですが、その後、例えば3年経って、参加した人たちの意見をもう少したくさん集めると面白いとおもいました。

それから、みんなで一緒にやっているのは素晴らしいですが、それをさらにオンラインやこれからのテクノロジーでつなげて、歌声とか、踊りとか、外からたくさんの方が参加できて、それがどんどん広がっていく。そしてその広がりを全員でビジュアルで共有できて、感動を体験する。実際に集まれるのもすごいし、集まれなくても、いろいろなかたちで集まったおっきな広がりになっていくということを目で捉えることが出来たらいいなと思いました。

○青柳会長 ありがとうございます。

芹澤評議員は何かありますか。

○芹澤評議員 一言だけ。コロナになってから、不要不急以外はやめまじょうといったような動きが大きかったと思います。そして、世界中、美術館だの、いろいろなもの、コンサートも中止になったり。その後、オンラインがどんどん始まったと思いますが。

フランスは、早くから不要不急ではないと。文化芸術は、人間としての生活の必要なものであるという位置付けをしますというのを宣言したんですね。この際ですから、東京でもそのような宣言をしていただくとか、芸術家とかも、私も従妹とが、数名音楽家で、ヨーロッパに在住ですが、すごく早くにその芸術家への支援の金額どーんと入ってきたと言っています。企業にとってはきちんと申請が必要だったけど、申請もなくどんって入ってきて驚いたと言っています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

そろそろ時間になりつつありますので、今、いただいた御意見、大変参考になると思いますので、都民の方々に分かりやすく、伝わるような文化戦略を事務局と調整していきたいと思います。

特に今、都市はですね、ほかの都市と差別化、区別化はやっぱり文化なんですね。今、ちょっと以前はニューヨークが非常に面白いと言われてたんですが、最近はロンドンのほうがより先端的で、アグレッシブで、それでエクスペリメンタルだということで、ロンドンが非常に注目されているんですね。

ですから、やっぱりその都市のその文化戦略というものが、これからの都市にとって非常に重要であると。そういうことで、この文化戦略2030をつくっていただいたんですが、それがもっともっとアグレッシブにできるような都市にしていきたいと思えますね。

それでは、大野評議員、どうぞ。

○大野評議員 この何年間の他の東京都の文化事業の中で、比較的、若い方々の参加が達成できなかったということがありますが、一方で、この2年間ぐらい国際コンクールで優勝した日本人の若者というのは、今までの年と比べると比較にならないぐらい多くの方々が1位、2位、入賞されているんですね。

それで、実は昨日、私は東京都交響楽団と、その中の1人である26歳の若者、ピアニストと一緒に共演したんですけれども、そこにはふだん、集まらないような若い方々がですね、聴衆としてお見えになってですね、そして彼の演奏を心から楽しんだということもありまして、そういうその若い力というのは演奏者にも聴衆にも生まれてきています。そして彼らが直接的にその日本の若者の文化、あるいは文化レベルを世界的なものに至らしめる原動力になるのではないかと思います、そうした視点も持ちながら育成、養成、あるいは発展に努めるという視点も必要かなというふうに思います。

一方、もう一つ私のほうから申し上げたいのは、東京芸術劇場と東京都交響楽団が、4年前からですね、OK！オーケストラというコンサートをずっと継続しております。そのOK！オーケストラというのは、赤ちゃんが来ても、泣いてもオーケーなんですね。それから、その辺を歩き回ってもオーケー、そして、それをあやす親御さんが席を立てて子供を追いかけるのもオーケー、そして、舞台上ではオーケストラが演奏している。それから、踊り手さんたちがそこに踊り、そして、歌手が集うというですね、非常に総合的な触れ合いの場になっていて、それをより強固な形で継続していくということも考えております。

ですから、片岡さんの発表の中に、「これは美術のほうだけですけども」という言葉で御説明がありましたけれども、音楽のほうも頑張っております、エコシステムに関しては相当なレベルに達していることも御理解いただければと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。

この文化戦略案に関しましては事務局と調整をしていって、案が通れるようにしていきたいと思いますが、調整した案については再度、評議員の皆様にお諮りして、御意見をいただきたいと思えます。

それでは、最後に小池知事のほうから御挨拶をいただきたいと思えますので、よろしくお願いたします。

○小池知事 はい、第32回になりました東京芸術文化評議会、こうやってリアルで御出席いただいた皆さん、そしてオンラインで御出席していただいた皆さん、なかなかこの評議会そのものが開けなかったというのが、この数年でありますけれども、こうやって大

きな節目をですね、節目というのは東京オリンピック・パラリンピックが機会でもございましたけれども、それを経て、このような形で意見交換ができること、大変うれしく思うところでございます。

今日、文化戦略についての貴重な御意見、皆様、活発に交わしていただきました。誠にありがとうございます。

そして、今申し上げましたように、東京2020オリンピック・パラリンピックで世界に発信をするということ、リアルのオリパラからずっと5年間かけて、1年延期されてしまったため、5年間になりましたけれど、16万件を超える文化プログラムを実施をしまして、大きなレガシーが生まれたと思います。

また、オリンピック・パラリンピックも結果的に無観客という形になりましたが、ところが結果としてですね、30億人がオリパラを見、さらには1つ1つの競技はYouTubeを通じて、280億人がその競技を見ているんですね。そういう形である意味、スポーツの、アスリートの皆さんもそうやって走る、泳ぐ、跳ぶ、これが大きな表現だと思うんですが、それを世界中が東京を舞台にして繰り広げられた、その表現を御覧いただいたというふうに思いますし、今日、お持ち帰りいただく、このまさゆめ、スペシャル13など、上野の砂場みたいなところで、ロボットが字を書くとか、BBCでそういう放送をしておりましたけれども、いろんなレガシーがつくられ、生まれたこと。そして、それをさらに伸ばしていくために、どうするかということで、今日、御意見を承ったわけでございます。

今後、東京都が重点的に取り組むための方向性を文化戦略として、作成をしていくということでもあります。

今、青柳先生からもお話がありましたように、やはり都市が文化によって魅力をつける。最近のこのまちづくりを見ますと、もう、高層ビルがばあ一つと中国などあってですね、どこがどこの都市なのかよく分からないけれども、でも、シドニーだったらオペラハウスがあったりとかね、シンガポールならあそこのプールが上に載かっている、あれがレガシーになっていたり、あれも1つのアートかなと思うわけではありますが。でも、ただただ高層ビルが建っていれば、先進都市なのか。といっても、やっぱりそこにいきれがあって、みんながほっとして、そして楽しむという、そういうことがなければ都市としての魅力というのは実は薄い。

最近、新しい都市をつくらうということで、世界中、様々ありますし、これまでも新都市、新首都というのができて、すごくきれいな街なみなだけけれども、でも、何かこう寂しいわねと。つくばができたときも、あまりにも都市計画がばちっとしていて、最初の頃は自殺者が出たりとか、結構あったのは、赤ちょうちんがないからじゃないかとですね、いろんなことを言われたわけであります。

やっぱり、そこで文化というのが人いきれの中から生まれてくる、それを古いも若きも、古き伝統から新しいものからいろんなものがごちゃ混ぜになってこそ、都市に命が吹き込まれるんだろうというふうに思っております。

そのための戦略をですね、今後、どうやっていくのか。評議員の皆様方には、今後ともお力添えをいただいて、東京としての文化の魅力をどう盛り込んでいくのか。ぜひ、これからもいろいろと御意見、そして、具体的な様々な御提案をいただければと、このように思っています。

今日は本当にお忙しいところありがとうございました。私のほうから、心からの御礼を申し上げます。ありがとうございます。オンラインで御出席いただいた皆様、本当にありがとうございます。

○**青柳会長** それでは、事務局にお返しします。

○**文化振興部長** はい、それでは、これにて第32回東京芸術文化評議会を終了したいと思います。

評議員の皆様、長時間にわたりましてありがとうございました。

以上